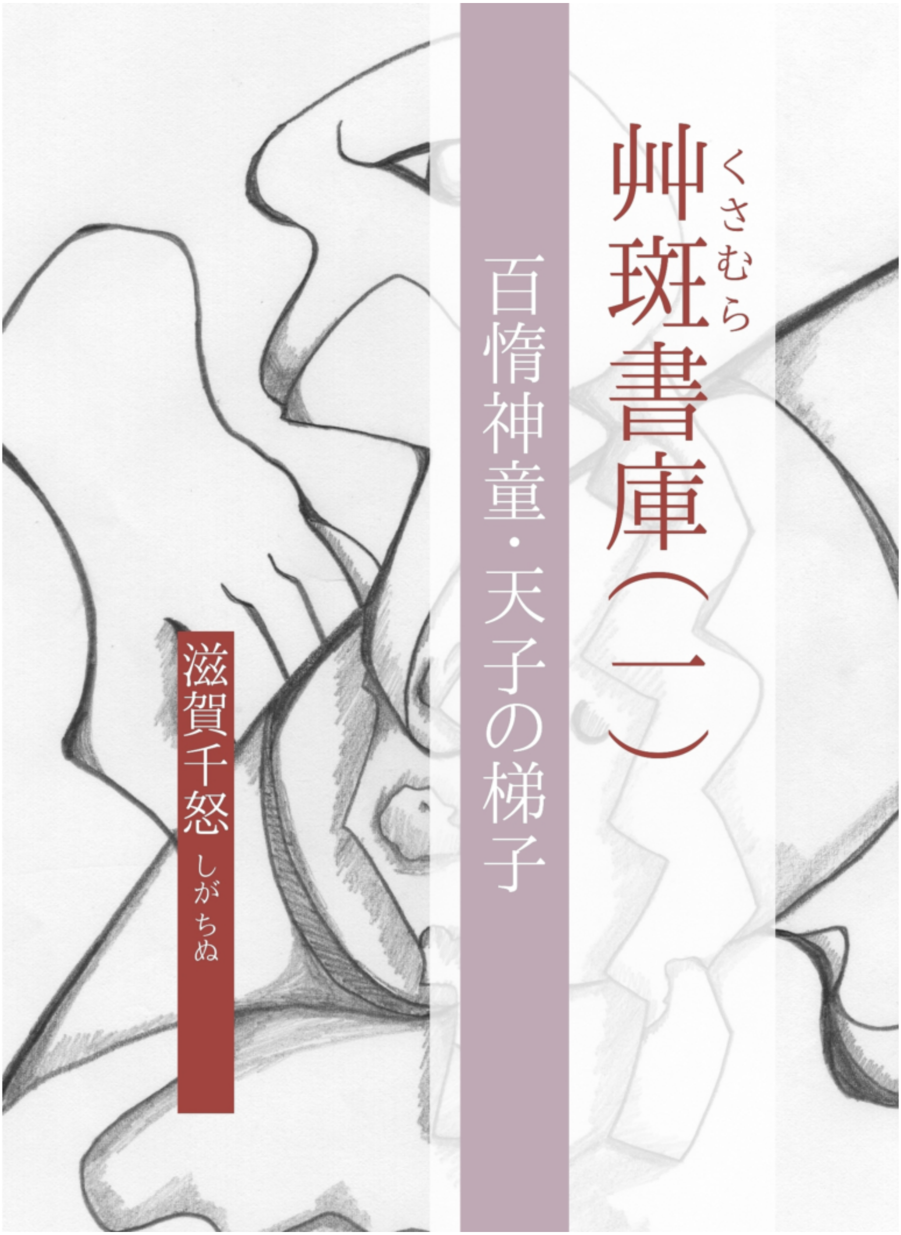


艸斑（くさむら）書庫（一）

百惰神童・天子の梯子

滋賀千怒（しがちぬ）

目次

概要
天使の梯子はしご
玉子の殻から
烏からす
蜻蛉とんぼ

概要

不思議な体験をもとにしたエッセイで、ノンフィクションです。

虫、害虫が話の題材の場合もあります。

閲覧、ご注意ください。

「東瀛篤國とうえいあつくに」

◆　題　◆

「天使の梯子はしご」

「玉子の殻から」

「烏からす」

「蜻蛉とんぼ」

天使の梯子はしご

　今にも小雨が降りそうな、曇りの日。
　私は、近所への用件があり。その移動中の休みで、なにげなく空を見上げた。
　すると、雲の色が薄灰色とは違う色になってて、雲と雲の隙間から光が射し込んで、そこだけ明るくなっていた。
　最初。空の〝その現象〟について、私は気にすることはなかったのだが。
　十字架のような形の光もあって、幻想的であったため。雲があると観察するようになり。
　絵画のような形から、キャラクターのような形まで、多様で。
　やがて、雲とは興味深いものなんだな、と思うように。
　その雲の現象については、後から、〝天使の梯子はしご〟と呼ばれるものだと知り。
　天使に会えるとか。とても、素敵な名称だな。と感じた。

『天使の梯子はしご』了

玉子の殻から

　ひどく暑い夏の日々が続いたとき。
　配達で届いた玉子を、熱したフライパンで調理して食べようと思い。
　フライパンの端で玉子の殻からを割ったら、二卵性の玉子で。
　玉子ひとつで目玉焼きが二個できた。
　とても、驚き。
　調べてみると、夏の暑さなどの雌鳥へのストレスも原因の一つだそうだ。
　その数年後。血のような物が含まれてる玉子があって、同じく、こちらもストレスが原因だそうだ。
　偶然にも、二卵性の玉子が見れたことは神秘的なことであるが。動物のおかれているストレス環境を、私に伝えてくれたのかもしれない。と、思った。

『玉子の殻から』了

烏からす

烏からすは、神話でも神さまとか、その使いとされ。
とても頭の良い動物である。
その行動も、賢い（時々、ずる賢い）とされており。
私も、そのように思ってて、様々な観察の対象にしている。

烏について、不思議に思った件を五つほど。

◎その一

あるときの夕方頃。〈カーカーッ〉と烏の鳴き声が多いので「何事だろう？」と確認すると。近くの団地の屋上に、異様な数の大量の烏が飛んで集合してて。

屋上に、なにか不審物でもあるのでは、と。いろいろ推測してしまうような状態だった。

◎その二

二十代のときに、市町村が管理の弓道（和弓）をしていた。

危険そうな活動は好きではなく。今思うと、なぜ、弓道など始めたのだろうであるが。

その、弓道場に向かう途中。道路の路肩に、子どもの烏が落ちてて。頭上では、しきりに親の烏が鳴いていた。

神社に由来の八咫烏は、烏という件もあり。気に留めることにした。

弓道は、三年間近く続けて。途中、杉並区の大宮八幡宮の大会に出場。千円ほどの弁当を食べて、祝賀会のようなものに参加。二〇〇五年には、母とともに日本国際博覧会（愛・地球博）へ行った際

の、クッキーの土産も届けた。
　辞めた後に。私の父母は役所が設置の神前式の挙式だった。と、母本人から伝えられ。
　母は三重県で育ったため。もしかすると、母方の祖父の頼みによる伊勢神宮のバックアップで、大宮八幡宮によるものだったのかもしれない。
　挙式の時期は不明だが、戸籍謄本によると婚姻の提出は昭和五拾壱（五十一）年九月拾弐（十二）日。とあるので、九月か、十月の秋の挙式なのかな、と思われる。
　「拾」は、「大字」と呼ばれるものらしく。うっかりと、「捨」と読めてしまう。
　その子烏も気になり。弓道を辞めず。
　父母の挙式の由来かもしれない神社の大会に出られて、良かったと思っている。
　愛・地球博のとき、イタリアとトルコのパビリオンにも行き。イタリアのパビリオンでは本を買い。トルコのパビリオンは自然の内容で落ち着いたものでよかった。
　他に、氷河の、アイスマンかマンモスのどちらかを見たと思うのだが、詳しくは忘れてしまい。ガスパビリオン（日本ガス協会）の燃える氷「メタンハイドレート」を見て、こんな資源があるんだ。と、印象的で。
　長久手日本館の全天球型（三六〇度）映像システム「地球の部屋」も見た気がするのだが。やはり、詳しくは忘れてしまい。
　押井守の「めざめの方舟」というパビリオンにも参加したが。なにかの儀式っぽい雰囲気で、蜘蛛（雲）を表してるのかもしれない、と思った。
　期間中のことだが。お昼が天ぷら系だったとき、天の繋がりだか

らだろうか。移動の際。当時は、まだ天皇（令和８年７月・現在は上皇）が来ていたのか、「皇室の方が来てる」というアナウンスがあり。帰りの東京駅の構内では、皇太子（令和８年７月・現在は天皇）が歩いてるのを見かけた。

　これも、八咫烏のおかげかもしれない。

◎その三

　今は、その電信柱はないが。

　あるとき、家の近くの電信柱を何気なく見ると、電信柱と電線に烏が数羽ほど留まっていた。

　目立って大きな鳴き声も上げずに、喧嘩する様子もなく。わりと大きめな烏だが、おとなしかった。

◎その四

　道路沿いにある公園の入口のベンチに座ってると、道路を挟んだ向かいの電信柱のてっぺんに、カラスが留まり。そこに巣があるわけでもないのに、足を折り曲げて電信柱のてっぺんに座り。

　じっと、私を見つめてくるような仕草で、まるで、犬のようだった。

◎その五

　道路沿いの歩道を歩いてると。四角い小型のビルの屋上に烏がいて。自分を鶏と思っているのか。〈カーカーカー〉と、鶏のように三回鳴いていた。

『烏からす』了

蜻蛉とんぼ

◎ その一

　時々。家のプランターや小さな庭の隅で、簡単な家庭菜園を行い。トマト、ジャガイモ、キュウリ、ゴーヤ、葱、紫蘇などの野菜を作るのだが。

　プチトマトとジャガイモを同時期に植えたことがあり。ふと、思い付きで、トマトとジャガイモはナス科で。たしか、受粉できたかも。というので、ジャガイモの花弁にトマトの花弁を合わせて、受粉させたところ。

　ジャガイモの方にトマトのような実ができて。たぶん、ポマトと呼ばれるもので、感動して。

　その後。本格的にナスにしようと、植えたところ。小さなナスしかできなく、がっかりしていたのだが。

　ある日。なんとなく、ナスを栽培してたプランターを見ると。支柱（棒）に、オニヤンマが留まっていた。

　蜻蛉とんぼそのものが珍しいので。大型のトンボだったこともあり、とても驚き。

　しかも、その年。自転車で移動中、オニヤンマが自転車の前や近くを飛んできて。

　まるで、懐かれたように思ってしまった。

◎ その二

　近所の工事が始まる前。

　アカトンボが交尾しながら飛んでいて。はじめて見た光景で。

　これが、神武天皇が言われた、秋津という事なのか。と思う。

『蜻蛉とんぼ』了

蚺斑書庫（一）　百惰神童・天使の梯子

発行日　2026年７月17日
著　者　滋賀千怒／（イラスト）Yumi／（編纂）瀧本千聖
発行元　東瀛篤國